

学校教育とビスラマ語

——ヴァヌアツにおけるピジン文化の認識論的考察——

福井 栄二郎

ヴァヌアツ¹⁾の独立期によく謳われた「多様性のなかの統一」は、スローガンとしては上出来だったかもしれないが、実際の政策となると、それは頭痛の種以外の何物でもなかったようだ。例えば独立後20年以上を経た現在でも、学校教育における使用言語をめぐる議論は錯綜し、その玉虫色の政策には定点が据えられず、政府の苦渋は容易に窺い知れる。本稿の目的は、複雑に絡み合ったこの問題を政策決定者とアネイチウム島²⁾に暮らす人々の両方の視点から読み解き、そこからヴァヌアツの国語であるビスラマ(Bislama)語の持つ曖昧性を明らかにすることである。

1. 話し言葉、書き言葉の現在

「英仏共同統治領ニューヘブリデス」が「ヴァヌアツ共和国」として1980年に独立する際、新憲法の第3条第1項には次のように記された。「共和国の国語はビスラマ語であり、公用語はビスラマ語、英語、仏語である。教育に用いられる主要言語は英語と仏語である」。またこうした国語、公用語とは別に、ヴァヌアツでは100を超える言語集団が存在しており³⁾、そのそれぞれが祖先から連綿と受け継がれてきた独自の伝統文化(カスタム)を保持している⁴⁾。憲法第3条ではこうした現地語の多様性についても触れている。「ヴァヌアツ共和国は、国の遺産でもある多様な現地語を保護し、そのうちのひとつを国語として採用することもありうる」。では人々はビスラマ語、現地語、英仏語という並存する多言語をどのように使い分けているのだろうか。

(1) ビスラマ語

異なった言語集団の者が会話をするとき用いられるのが、かつてピジン・イングリッシュと呼ばれていたビスラマ語であり、現在ではヴァヌアツのほぼすべての人々が話することができる。例えばCrowleyの記述のなかに「単一の現地語が話されていて、他島民が少なく、また子どもたちが都市部へ出ていく機会の比較的少ないアネイチウムやエロマンガなど、その言語(ビスラマ語)が話せない若い子どもたちがいる所もある」[Crowley 2000a:53、括弧内は筆者の補足]という説明があるが、アネイチウムに関していえばこれは明らかな間違いである。

島の北部にはツナ島民のコミュニティがあり、現在、警察官、小学校の教師、気象観測員などの俸給職に就いている者の多くはタンナ、ツナ、アニワなど近隣の他島民である。もちろん彼らとはビスラマ語でコミュニケーションを行うことになる。また教会でも基本的にビスラマ語が用いられる。現在、長老派教会(Presbyterian Church)常駐の牧師はマロ島の出身者であり、彼が説教するときはもちろんであるが、彼が他の教会へ巡回に出てしまっ、他のアネイチウム島民が説教を行うときも

「国際文化学」第8号: 17 - 31 ページ 2003

神戸大学国際文化学会©福井栄二郎

キーワード: 学校教育、ビスラマ語、ピジン、ヴァヌアツ、アネイチウム

Key words: school education, Bislama, pidgin, Vanuatu, Aneityum

ビスラマ語の聖書が用いられ、ビスラマ語の聖歌が歌われる。ごくまれに、アネイチウム語の聖歌が歌われることもあるが、それは牧師がそこにいるかどうかとは関係がない。

そして婚姻を機に多くの他島民がアネイチウムへとやってくる。夫婦間ではビスラマ語が常に交わされることになり、その子どもは他の子どもよりも早くビスラマ語を習得することになる。また島に中学校のないアネイチウムでは、他島(多くはタンナとエファテ)への進学を余儀なくされる。筆者の調査時にも、そのような事情で島を空けている子どもたちが多くいた。もちろんこの子どもたちは、出先の島ではビスラマ語で生活しているのだから、逆に言えば、島内に中学校を持つ場所よりもビスラマ語習得の機会が多いとも言える。このように親たちのビスラマ語を聞き覚えて、子どもたちはそれを早い段階(一般的には小学校低学年)で覚えるし、また老人たちも流暢に話すことができる。

一方、書き言葉としてのビスラマ語に関して興味深い調査がある。独立前夜の1980年5月に、Charpentierらが言語調査を行った。その質問表のなかに「あなたは家族に手紙を書く際に、どの言語を用いますか」という項目があったのだが、それに「ビスラマ語だけ(only Bislama)」と答えたのは、全回答者のわずか2%に過ぎなかったのである[Charpentier & Tryon 1982:151]⁵⁾。後述するが、この時期ビスラマ語は広く普及しており、普通に話される言語のひとつになっていた。Charpentierは次のように結論づける。「宣教師たちの正字法が確立しているところでは、1970年まで家族の成員への手紙は現地語で書かれた。現地語の正字法が確立していないところでは、メラネシア人たちは英語かフランス語で手紙を書いたか、あるいは手紙などまったく書かなかった。ビスラマ語で書く者もいたが、都市の言語(metropolitan language、英仏語を指す)に関する知識が著しく乏しい時か現地語の正字法が存在しない場合に限られていた。確かにビスラマ語は一般の行政文書などに普及するようにはなったが、1980年以降もこのような状況から顕著な変化はみられない。そしてそれは正字法の規格化がないために、ひどく妨げられているのだ。このような理由と行政の上層部でみられる偏見のせいで、ビスラマ語は口語ではその役割を担ったものの、政府が用いる書き言葉としては、まだまだ英語やフランス語に取って変わりそうな気配は見受けられないのである」[Charpentier & Tryon 1982:157、括弧内は筆者の補足]。

驚くべきことだが、このCharpentierの予想は、見事に覆されることになる。現在、ほとんどの行政文書はビスラマ語で書かれているし、また筆者の知る限り、アネイチウムの人々はアネイチウム語ではなくビスラマ語で手紙を書く。掲示板に貼られる「お知らせ」も、たとえそれが少数のアネイチウム島民に向けたものであっても、ビスラマ語で書かれる。またアネイチウムにはインタサレップ(*intasalep*)と呼ばれる伝統的な会議があり、浮気、盗難、土地問題など何か問題が起ると、この会議に「提訴」する。そしてチーフや老人たちが進行役となって会議を開き、「被告」「原告」「観衆」⁶⁾から広く意見を求め、結論を導き出す。この会議では伝統的知識が必要となる場合が多いので、特別な場合を除いてアネイチウム語で進められる⁷⁾。そして誰がどのような発言をしたかという簡単な「議事録」も取られるのだが、これがビスラマ語で書かれることが多いのである。つまり書記は、そこで議論されているアネイチウム語を一度頭のなかでビスラマ語に翻訳してノートに記すことになるのだ。このようにビスラマ語は、主に他言語集団の者との話し言葉として、そして書き言葉としてその役割を担っているということができる。

(2) アネイチウム語

一方、村落部で生活する人々にとって、日常、最も頻繁に用いる機会が多いのが自分たちの母語でもあるアネイチウム語である。1848年に長老派教会のJohn Geddieが来島して以来、この島は長老

派教会の宣教拠点となり、その後も多くの宣教師たちがやってきた。当時の宣教師たちはビスラマ語に対する否定的見解を持っていたので、福音を伝える手段は専ら現地語であった。つまり彼らは長期間滞在し、現地語を覚えることがその宣教の足掛かりとなったのである。そして福音を伝える傍ら、現地人に簡単な読み書き、裁縫、土木作業、料理などを教えていた。そうした過程のなかで宣教師たちによるアネイチウム語の辞書が編まれたが[Inglis 1882、Lawrie 1892、Turner 1861 など]、それらは主に宣教師や商人などに向けたものであり、アネイチウムの人々が自由に文字を操るために編まれたものではなかった。

1966年には言語学者 Hewitt による音素表と語彙表が作られたが[Hewitt 1966]、語彙数も限られていたうえ(見出し語で約 1500 語)、これも主に研究者向けに作られたものであった。一方、1980年代初頭からアネイチウム語の調査を開始した Lynch は、数本の学術論文の後[Lynch 1982、1991、1995、Lynch and Spriggs 1995、Lynch and Tepahae 1999]、2000年にアネイチウム語の文法書を[Lynch 2000]、そして2001年にはヴァヌアツカルチュラルセンターのフィールドワーカー⁸⁾でアネイチウム島民の Tepahae と共に語彙数約 5000 を誇る辞書を完成させた[Lynch and Tepahae 2001]。特に辞書は「対英語」「対ビスラマ語」という2種類の対訳があり、さらに序文に「私たち(编者)ふたりは、この辞書がすべてのアネイチウム島民に役立つことを望んでいる」[Lynch and Tepahae 2001: viii、括弧内は筆者の補足]と記されていることからわかるように、一般のアネイチウム島民をも視野に入れたものであった。

だがこうした宣教師たちの文字化、あるいは言語学者たちの辞書編纂にもかかわらず、現在、人々はアネイチウム語で何かを書くということをほとんどしない。もちろん言語学者や宣教師たちはすべてアルファベットに置き換えたわけだから⁹⁾、書き言葉としてビスラマ語を駆使する島民たちにとって書けないことはない。しかし人々は一様に「アネイチウム語で書くのは苦手」だと述べる。それは難しい議論や概念だからというわけではなく、例えば掲示板の「お知らせ」程度のことで、やはりビスラマ語の方が書きやすいのである。つまり、アネイチウム語は主に話し言葉としての役割だけを担っているのである。

(3) 英仏語

憲法で公用語の地位を保障された英仏語であるが、村落部で暮らす人々によっては、ほとんど話す機会はなく、また書かれることもない。つまりそれはあくまでも「外国の言語」なのである。そしてこうした認識の裏側に、英仏語のもうひとつの顔がある。それが「学校教育の言語」という側面である。上述したように、教育に用いられるのは英仏語であると憲法には記されているが、これは換言すれば、Lynch が指摘するように、ヴァヌアツは世界でも珍しい、学校教育の場で国語(ビスラマ語)が教授されず、また使用さえされない国家であるということの意味している[Lynch 1996: 248]。

このようにヴァヌアツにおける英仏語を考えると、学校教育と切り離して考えることはできず¹⁰⁾、それは英仏語を難なく話せる者は、一般的に高学歴を有しているという事実によって裏付けられる。ところが統計的にみると、現在ヴァヌアツで中学校を卒業できるのは全児童の 20% ほど、そこからさらに高等中学校に進学できるのは 8% ほどである[RV 2000]。だから村落部には中学校に進学しなかった者、中学校は卒業したが高等中学校に進学しなかった者、あるいは高学歴を得ながらも職に就けなかった者が留まることになる。しかし彼らは平等主義的な自給自足の生活だけを営んでいるわけではない。現在では衣食だけでなく、子どもの学費、教会への寄付等で現金が必要になる機会も少なくない。そこで現金獲得の手段が必要になるのだが、現在、アネイチウムには約 1 ヶ月に 1

度、オーストラリアからの観光船がやってくる¹¹⁾。そしてその観光客相手に商売をするのが彼らにとって最も手っ取り早い現金収入となる。女性たちが各々アクセサリーやバスケットなどを編んで売ることもあるが、こうした商売とは別に、もっと観光客と密に接する商売がある。例えば貸しカヌー屋やツアーガイド。あるいは首都の観光代理店と直接連絡を取り合ったりする仕事もある。こうした仕事は、ある程度の英語の能力が必要となるので、誰でもができるわけではない。つまり高学歴を得ながらも島にいる人たちが優先して就くことができる職なのである。

確かに村落部で普通に生活している限り、英仏語は「読み」「書き」「会話」共に、ほとんど使用されていないが、それでも学校教育や学歴と結びついて、こうした言語ができることが現金を得るのに有利であるという認識はアネイチュムでも浸透している。

これまで述べたことを整理しておこう。アネイチュムには大きく3種の言語が並存している。国語であるビスラマ語は、他島民との話し言葉、あるいは一般的な書き言葉として定着している。アネイチュム語は、主な話し言葉ではあるが、ほとんど書かれることはない。また英仏語は話されも書かれもせず、「教育の言語」あるいは「外国の言語」という認識が強い一方で、現金収入を得る手段としても位置付けられている。

しかしここで留意すべき重要な点は、これら3種の言語がそれぞれ独自の場を有しているわけではないということである。つまり人々は「ビスラマ語」「現地語」「英仏語」という対等な三角形を描いて、世界を3つに棲み分けているわけではないのである。例えばカリブ海社会のように、西洋と現地社会と移住労働者が邂逅し、近代的都市と新言語の誕生が求心力となって異種混交が繰り返され、その結果、まったく新しい文化が生まれることがある。いわゆる「クレオール文化」である (cf. 遠藤 2002、今福 1994)。確かにビスラマ語の成立はクレオール語のそれと似ている。そして現在の都市部では異言語集団の者が結婚し、その結果、ビスラマ語を母語にする者も多く存在する。しかし人々のアイデンティティは生まれ育った都市ではなく、行ったこともない村落部にある。つまりビスラマ語に支えられた新しい文化は誕生していないのだ。吉岡はこうした現象を分析し、オセアニアの都市文化は「クレオール文化」ではなく「ピジン文化」であると指摘した [吉岡 2002]。しかし彼の分析の場合、扱った題材がカヴァ¹²⁾という、村のカスタムと密接に結びついたものであったため、人々の認識はどうしても村落部に向かざるを得なかった。だから「ピジン文化」の持つアンビヴァレントな特徴が押さえきれずにいたことも否めない。ではピジンそのものであるビスラマ語からその独自性を描くことはできないのだろうか。そう考えたときに、独立以来、その使用言語をめぐって紆余曲折を繰り返してきた学校教育という場は非常に興味深い事例を提示してくれる。

2. 学校教育におけるビスラマ語

政府は「マルチリンガリズム」を標榜し¹³⁾、統計上は40～50%の人が英仏語のどちらか一方を話せることになっているのであるが、そうした数字とは別に、実際に英仏語を難なく話せる人は10～20%ぐらいだという見解もある [Miles 1998:121-122]。英仏語が言葉としてきちんと理解できないという現実の一方で、学校では英仏語しか話されていない。ということは、学校で教えられていることを子どもたちはきちんと理解していないのではないかという憂慮は、独立以降、ヴァヌアツ教育省が常に抱える問題であった。そのため政府は何度も対策を講じたのであるが、期待される成果は未だ収められていない¹⁴⁾。

そしてその代替案のひとつとして、ビスラマ語を学校教育で用いればよいのではないかという声が

挙がってくるのは至極当然のことではある。しかし教育省はこれまでビスラマ語の導入に消極的であった。それにはいくつかの要因が考えられる。まず第一に、その語彙の少なさである。1995年に出版されたCrowley編によるビスラマ語辞書[Crowley 1995b]は、現存する辞書のなかで最も豊富な語彙数を誇るが、それでも収録語彙数は見出し語で4000語である。学校で教えるべき用語がビスラマ語には少なく、結局、英語から借入してしまう。それと関連する第二の要因は、英語／ビスラマ語の2コード使い分けの難しさである。ビスラマ語はその語彙の多くは英語に由来するものが多いが、そのなかには英語にはない意味がビスラマ語に付随していたりするものもある。小学校に入学する時点で子どもたちはビスラマ語を不完全に習得しているため、その段階で語彙が類似していて、意味や文法がまったく異なる英語をビスラマ語で教授することは、子どもたちを混乱に陥れるというのである[Charpentier 1997:235-238]。しかしこれらの要因には、すぐに反論が用意されている。Singhが1998年から1999年にかけてヴァヌアツとソロモンで行った調査によると、英語を教授する際に、理解度の低い英語そのものを用いるよりも、ピジン(ヴァヌアツの場合ビスラマ語、ソロモンの場合ソロモン・ピジン)を用いた方が、子どもたちの「読む」「書く」「聞く」能力が共に上昇したというのである[Singh 2001]。

しかしそうしたテクニカルな要因だけではなく、もっと認識論的な要因もある。その第三の要因として挙げられるのが、ビスラマ語に対する否定的な態度である。それを理解するには、まずビスラマ語の歴史を紐解かなくては行けない。19世紀中頃から、南太平洋にはナマコやビャクダンを目当てにヨーロッパの商人たちが大挙して押しかけた。そのなかには「ブラックバーディング」と呼ばれる労働者の斡旋もあった¹⁵⁾。そうした白人との接触のなかで、リングフランカとしてのピジンが、差し急ぎ必要となったコミュニケーションの手段として生み出されていく。契約が終わり、村に帰った彼らにとって、それは他集団とコミュニケーションのできる非常に有用な道具となっていた。これがヴァヌアツの場合ビスラマ語になるし、ソロモンの場合はソロモン・ピジン、パプアニューギニアではトック・ピジンとしてそれぞれ発展していくことになる。それまでヴァヌアツには、北部で話されていたモタ語や中部のグナ語のように、特定の言語集団を超えて用いられる言語はあったが[Crowley 1989:118]、ヴァヌアツ全土をカバーできる言語は存在しなかった。しかし19世紀末になると、国内のプランテーションで働くために、人々は島嶼間をかなり頻繁に往来するようになり、[Crowley 2000a:53]、実際、この頃からビスラマ語は急速にその勢力を広げていくことになった。

だが、その地位となると決して厚遇されたものではなかった。英仏植民地行政府にとって、ビスラマ語は取るに足らない「ブローケン・イングリッシュ」であったし、村落部でも、老人たちはそれを「村を捨てていった者たちの言語」と考え、禁じられたところも少なくなかった。そして19世紀後半からヴァヌアツの諸社会に多大な影響をもたらした宣教師たちにとってもその位置付けは同様であった。誘拐まがいな人々をプランテーションへと連れて行く商人と、人道的見地からそれに反対する宣教師たちの間では争いが頻繁にあった。そうした状況を踏まえるならば、彼らがプランテーションの言語という意味合いが強いビスラマ語を、福音を十分に伝えられない「ジャーゴン」と捉えていたことは不思議なことではなかったし、教会で用いられなかったのも当然であった。概して言えば「その言語は「学のないネイティヴ」たちが話している言語であり、プランテーションの中や冗談を言い合うには適した言葉かもしれないが、「まじめな」ことを論じるには不向きだ」[Lynch 1996:250]という認識が持たれていたのである。

しかしこうした考え方は21世紀になっても未だ払拭されたとはいいがたいし、あるいは「学のあるネイティヴ」にきちんと受け継がれてさえもいるのだ。筆者が税関に勤務する現地人と話していたと

きのことである。彼女は「そんな小さい言語(アネイチウム語)や正しくない言語(ビスラマ語)を覚えてどうするの。英語とかフランス語を覚えるのが先決でしょう」と言い放ったのだ。先述したように、彼女のような公務員に限らず、首都で仕事を得るにはある程度の学歴と英仏語を話せることが大きなアドヴァンテージとなる。彼女は仕事柄、英語を話すことが多いが、もちろん現地人と話すときはビスラマ語を用いる。いつも話している言葉を「正しくない」と言い切る彼女の発言は、こうしたステイタスの裏返しなのかもしれない。繰り返すが、やはりこうしたビスラマ語に対する否定的な考え方を持つのは高等教育を受けた現地人に多い。Lynch は述べる。「(国会での議論で専らビスラマ語を使用している)政治家や、(その仕事の大部分でビスラマ語を用いる)政府の役人や、(一般にビスラマ語を使ってサービスを行う)教会のリーダーによってこのような言明がなされるのである」[Lynch 1996:252、括弧内は Lynch のもの]。こうした背景を踏まえると、言語、教育の政策にかかわる現地人エリートのなかに、未だビスラマ語に対する根強い偏見が残っているのも事実なのである。

そしてビスラマ語が教育に向かない要因として必ず挙げられるのが正字法の欠如である¹⁶⁾。先のビスラマ語に対する否定的な態度と絡み合いながら、「正字法を持たない言語だから教育には適さない」=「教育には適さないから劣った言語である」=「劣った言語だから正字法を持たない」という循環する等式ができてしまうのだ。Lynch はこうした考えに反対している者のひとりであるし、何よりビスラマ語を学校教育の場で使用することを提唱している。彼の批判の矛先は、正字法が確立していないことよりも、その否定的な態度のために正字法の確立や教育に用いることを前向きに検討しない政府の態度に向けられる [Lynch 1996:252 - 253]。その事例として、彼は政府が発行している「ヴァヌアツ・ウィークリー」という新聞を槍玉に挙げる。そこではいかに英語とビスラマ語が混在しているか、あるいはいかにビスラマ語の綴りがいいかげんであるかなどが事例と共に示されている [Lynch 1996:253 - 255]。そして彼は結論づける。「私は問題の性質や重要性を示すため、こうした標準化していない形態をかなり詳細に示した。標準化された書き言葉としてのビスラマ語を最も促進すべき立場にあり、おそらくこの課題を負うべき立場にある政府の機関でさえ、一貫したやり方で単語を綴ることができないのである。さらに言えば、おそらくこれは首尾一貫した綴りを必要とする編集方針ではないのかもしれない。これは書き言葉のビスラマ語ならば「何でもあり」という態度—おそらくビスラマは「正しい」言語ではないという考え方に起因する態度—を示しているのである」[Lynch 1996:255]。

3. アネイチウムからみる学校教育、カスタム、ビスラマ語

ところで政府が教育方針の刷新を図る際、子どもたちの学力向上だけを念頭に置いているかというところではない。憲法で保障されているように、多数存在する現地語、およびその言語体系と不可分に結びついているカスタムは国の遺産であり、積極的に保護されるべきものである。しかしこうしたカスタムは、都市への人口流出、西洋的価値観への追従などで忘れ去られていく傾向にある、というのが人々の一般的な認識である。そこで教育省としては、こうしたカスタム保護も視野に入れた教育のあり方を模索している。例えば、およそ 10 年計画で学校教育を抜本的に見直すことを目的とした「教育マスタープラン (Education Master Plan)」が 2000 年から発動されているが、そこには、「我々は言語的・文化的遺産、アイデンティティ、多様性を尊重し、保存するために教育システムを用いることをその目標とする」と記されている (RV n.d.:3)。この「マスタープラン」における改革の目玉が小学校 8 年制への移行であり、最初の 2 年間に現地語を導入することである。子どもたちの慣れ

親しんだ母語で教授を行えば、それだけ学力も向上するし、カスタム保護にもつながるという教育省の狙いがそこに垣間見える。またその2年間は小学校よりも数の多い幼稚園を用い、3年目から小学校の校舎でこれまでのような英仏語による授業を行うのだという。そうすることによって「教育学的、財政的な利点に加え、教育とヴァヌアツの文化、歴史、アイデンティティ、現実との関連性が大きくなるので、広く支持を得ることができる」[RV n.d.:10、強調は原文による]というのである。エリートたちは「学力向上」と「カスタム保護」という問題を解消するべく、そのカンフル剤として現地語による教育を導入し始めている。しかしその背景には、有識者たちの進言にもかかわらずビスラマ語導入がほとんど検討されなかったという事実があり、それはやはり彼らの偏見に根ざしているのかもしれない。こうした教育政策をめぐる紆余曲折の一方で、アネイチウムに暮らす人々たちの認識は、彼らエリートのそれと微妙にずれている。そのズレの大きな前提となるのが、学校教育への無関心である。

例えば全6年生は毎年11月に全国統一試験を受けなければならない。この成績如何で、中学校へ進学できるかどうかが決まるのであるが、昨年度、アネルゴワット小学校の6年生は18名いたにもかかわらず、中学へ進学できたのはそのうち3名だけであった。残りの者はもう一度6年生をやり直して試験を受けるか、そのまま卒業するしかない。この結果は、確かにここ数年の水準(大体10名前後)からいってもひどいものであったらしく、一時期は親たちの口から学校の方針や子どもたちの態度に批判がこぼれることもあった。しかし、それとて長くは続かず、学校側も具体的な対策を立てるようなことはしなかった。こうした親たちの学校教育に対する無関心¹⁷⁾は、聞き取り調査のいたるところに垣間見ることができる。以下には代表的な3つの意見を提示する。

「うちの子どもは中学校に行きたがっているのかもしれないが、うちにはそんな金がない」(30代、男性、中学校卒)。無関心の一番の要因は学費である。国立小学校は年額3000ヴァツであるが、中学校の場合、国立の中学校で24000ヴァツ、私立の中学校で30000ヴァツ前後が必要となる¹⁸⁾。現在アネイチウムには中学校がないので、子どもたちは必然的に他島で寄宿生活を送っているのであるが、クリスマスや長期休暇の際には帰島する。そうすると、これに年数度の渡航費が必要となる¹⁹⁾。親に定期的な収入がない場合、この額はかなりの負担となり、子どもの意思とは無関係に親が進学を許可できないというケースも少なくない。

第二に「街へ出ると遊んでばかりで、勉強しない」(40代、女性、小学校卒)という意見もよく耳にする。テレビがあり、ショッピングができ、自動車が走っていて、クラブで酒が飲める首都のポートヴィラには、村にはない娯楽がたくさんあり、思春期の子どもたちにとってそれは十分すぎる魅力となる。学校へ行かず、ただ街をブラブラしていたので学校を留年し、その結果、親から仕送りを止められて帰島した子どももアネイチウムには多くいる。

そして「中学校へ行っても、みんな仕事がなく帰ってくる」(20代、女性、専門学校卒)。先述したように、中学を無事卒業したところで、就業できずに島に戻ってくるケースは、もはやヴァヌアツの社会問題でさえあり、学校教育に携わる者が直面する大きな問題のひとつである。小、中、専門学校を合わせて、毎年、3500人ほどの子どもたちが学校を卒業するが、そのうち定職を得るのは500人ほどだと言われている。[RV n.d.:11-12、138-153]。親の立場からすれば、多額の「投資」をしたにもかかわらず、結局、職に就かず戻ってくるだけなのであるから、学校教育に対して否定的な考えを持つのも不思議ではない。

またこうした見解とは別に、学校教育は島のカスタムをダメにするという一般的な認識がある。つまり学校教育という制度そのものが「白人のやり方(fasin blong waetman)」であり、それに追従することは「自分たちのやり方、カスタム」を忘失することになるのだという反比例の関係がそこにはある

[福井 2001:6]。例えば、筆者の滞在中にこういうことがあった。ある男Aは、結婚しているにもかかわらず、妻の実妹と関係を持った。召集されたインタサレップの場で、Aは謝罪するのではなく、「妻と別れて、その妹と結婚したい」と述べた。その場にいた近親親族たちはそれに激怒し、彼に殴りかかり、場は騒然となった。場は続行不可能で、一時、散会したのであるが、その道すがら、彼の近親親族のひとりが筆者に話しかけてきた。「Aはまったく他人に対する配慮というものを知らない。中学に行っている間ずっと街にいたから、島のカスタムを知らないんだ」。こういう言い回しはよく耳にするが、事実だけを述べるならこれは正しくない。浮気をしたり、親族を大切にしないのは、確かに「カスタムを知らない」ことなのであるが、それは決して高学歴者に限ったことではないのだ。つまり低学歴者であっても浮気はするし、他人に迷惑をかけることがある。しかし彼らは「カスタムを知らない」と言われても、学歴や街での生活が引き合いに出されることはない。だが高学歴のAの場合だけ、学校教育がカスタムを弱めたのだという尾鱗がつくのである。

アネイチウムでカスタムについて最もよく知っていると言われる男Bは、まだ40歳代である。Bは幼い頃に近親親族の祖父に育てられたが、祖父はBが小学校に行くのを許さなかった。その代わりに、彼はアネイチウムのカスタムに関する知識をすべてBに口頭伝授した。Bは小学校にも行っていないため、つい最近まで自分の名前もきちんと書けなかったし、現在でも読み書きには明るくない。しかしBの持つ知識に対する人々の信頼度には比類なきものがある。彼自身は自分の息子を小学校に通わせているが、学校教育には否定的である。「島で生きていくために大事なことは、学校では教えてくれない。今ではアネイチウムのカスタムはすっかりダメになってしまったが、それは学校と教会のせいだ」。

人々の「白人のやり方」と「カスタム」という二項対立のなかで、学校教育という制度は、いつもその前者にカテゴライズされてしまう。だからそこで用いられる言語自体は、カスタムの保存とまったく関係がない。例えば、2000年に筆者が調査を行った際、小学校でアネイチウムのカスタムを教えるという特別授業があった[福井 2001:5]。フィールドワーカーや老人たちが小学校へ赴き、島のカスタムに関するレクチャーを行うのであるが、これは主に現地語で行われた。この授業について人々に尋ねると、概して懐疑的な様子であった。つまり、「いいことだとは思うんだけどね」と前置きをしておいて、「やっぱり、学校でカスタムを教えるのは無理なんじゃないか」と言うのである。実際、2001年度の調査ではこの特別授業はなくなっていたし、他に学校でカスタムが教えられる機会も存在しなかった。もちろん、カスタムは人々の生活のよすがであり、それが喪失していくという現状は彼らにとっても好ましいものではないし、できることならば保護、保存したいという気持ちはある。しかしその手段として学校教育が念頭に置かれることはないのである。ここが、人々とエリートたちの観点が大きく食い違うところである。

筆者は機会があるごとに、学校教育へのビスラマ語導入について人々に尋ねてみた。まず、賛成派の主な意見は「子どもたちの理解度を優先するなら、ビスラマ語を使った方がいいのかもしれない」(20代、男性、教師)というものであり、反対派のそれは「ビスラマ語で授業を行うと、英仏語が話せなくなる。仕事を得るには、やっぱり話せたほうがいい」(20代、女性、中学校中退)というものであった。しかし一番多かった意見は「よくわからない」であり、それは学校教育に関する無関心を裏付けている。いずれにせよ、学校でビスラマ語を用いることが、島のカスタムに影響を与えるという意見がでてこなかったことは事実であり、ここでも政策レベルと人々の認識との間の齟齬が浮き彫りになっている。エリートたちや有識者のなかにはビスラマ語の導入が現地語、果てはそれで語られるカスタムを滅ぼすのではないかという危惧がある[Charpentier 1997、Muhlhausler 1987、1996、

cf. Crowley 1995a、2000b]。確かにアネイチュムでも関係名称、数詞、体の部位などの現地語はビスラマ語に取って代わられようとしている[Lynch 1991]。しかしBが人々から尊敬を集めるのは、モノの名前を現地語でたくさん知っているからではなく、親族集団の歴史や土地所有の変遷、タロの植え方、個人名のつけ方など、まさにアネイチュムの「やり方(*nedou*)」を熟知しているからである。そしてそれは学校で用いられる言語とは関係がない。

それでは学校教育とは別に、ビスラマ語そのものに対する認識はどうであろうか。英仏語に親しんだエリートたちが、その裏返しとしてビスラマ語に偏見を持っていたのに対し、英仏語にあまり馴染みのない村落部ではこうした傾向はないといえる。先述したように、それはあくまでも他島民とのコミュニケーションの手段なのである。これは換言すれば、ビスラマ語は「白人のやり方(言語)」ではないことを意味している。その証拠に、島に来る観光客は英仏語ばかりを話し、誰一人としてビスラマ語を操れない。しかし、ビスラマ語は決してカスタムではない。それは上述したようなプランテーション言語として誕生した歴史的背景よりも、島のカスタムはビスラマ語では上手く言い表せないという現実の方が、人々の認識のなかで先行している。

先述したように、掲示板には一般的にビスラマ語で書かれた「お知らせ」が貼られるのであるが、筆者の滞在中、唯一、アネイチュム語で書かれた「お知らせ」があった。それはインタサレップで土地問題が話し合われるので、何かそれに関する問題を抱えている者は申し出るようにといった内容であった。そのなかで、土地所有者の資質について述べる個所があった。

① *nedou ecen* ② *nedou ecamae* ③ *nedou upoupou* ④ *imyisjisinvejec*

nedou は「行為、振る舞い、やり方」を意味する。そして *ecen* は「敬意」、*ecamae*²⁰⁾ は「恥ずかしがる」、*upoupou* は「ものすごく下に」、*imyisjisinvejec*²¹⁾ は「信用する」という意味である。敢えて日本語らしく訳するならば、①は「相手に対する敬意を払う」、②は「自らの行いに横柄にならず、恥じらいを持つ」、③は「謙遜する」、④は「信用する」となる。しかし、こうしたニュアンスを表せる語彙はビスラマ語にはない。ビスラマ語で示した際、①②③はどれも「*rispek*」という語に収斂されてしまって、本来、アネイチュム語が持っている意味からは乖離してしまう(④は「*bilif*」という語で表すことができる)。こうした事例からも明らかなように、カスタムに関することは現地語の概念と密接に結びついており、そしてそれはビスラマ語では掬い取れない場合が多いのである。

4. ビスラマ語の場所

「われわれ」と「彼ら」、「近代」と「伝統」、「西洋」と「非西洋」、「スクール」と「カスタム」といった単純な二項対立は、改めてサイドの『オリエンタリズム』を引かずとも人類学の俎上ではこれまで完膚なきまでに批判されてきたものであるし、もちろん人類学者が熟考するに値する議論ではある。しかし批判されるべきは二項対立という分析概念そのものではなく、それが根ざしている排他的本質主義であったことを思い起こしてみよう[小田 1996、吉岡 2000a]。だからヴァヌアツの世界観を「カスタム」と「白人のやり方」に分けて分析しても[吉岡 1994、船曳 1983]、それは人々の認識のなかに曖昧にある枠組みであるがゆえに正当性を持つのである。確かに、こうした二項対立が批判された背景には、その枠組みでは捉えることのできない現象が生じてきたからだという理由がある。だからといってこの枠組み自体をご破算にして二者の融合を謳うのは[White 1993、Lindstrom 1997]、人々の視点を無視した短絡的な結論である[cf. 吉岡 2000b]。ではこれまで論じてきたビスラマ語は、この二項対立の枠組みのなかでどのように位置付けられるのだろうか。

まず、その多くが都市部に暮らす国家エリートにとって、ビスラマ語は日常のなかで最も頻繁に用いる言語である。若者のなかにはそれが母語になる者もいる。しかし学校教育で英仏語に慣れ親しんだがゆえに、ビスラマ語には「田舎の」言語」[豊田 2000:168]という認識があり、それは一般的に西洋人が持つ「ブローケン・イングリッシュ」「ジャーゴン」という偏見に裏打ちされたものでもある。つまり彼らは学校教育の重要性や、英仏語の利点を十分に理解するからこそ、そこでのビスラマ語使用には否定的な態度を取るのである。また他方で、彼らは村のカスタムが大切に保護しなくてはならないことも知っている。だから現地語の導入には踏み切ることが、やはりビスラマ語には反対するのである。こうして「白人のやり方」の観点からも、カスタム保護の観点(カスタムの観点ではない)からも否定された場所にビスラマ語は位置付けられる。しかし、繰り返すが、彼らは一方で否定しておきながら、他方、それは日々の生活で使用頻度の最も高い言語なのである。

村落部に暮らす人々にとってビスラマ語は書き言葉であり、他言語集団の者と話す際に用いられる話し言葉であった。人々はその利便性を十分に理解している。そしてエリートたちが持っていた偏見も、彼らの認識のなかには見当たらない。しかしビスラマ語を学校教育という場から見るとはとても困難である。それは学校教育という制度自体が「白人のやり方」に属しているからである。そしてビスラマ語自体は、明らかにカスタムではないが、一方で「白人の言語」でもなく、「われわれ」と「彼ら」の間(あるいはその外側)にあるものとしか言い表せないような場所に据えられている。それは自分たちの言語集団を超えるが、決して白人の世界へ繋がっているものではない。そして「ヴァヌアツ」というナショナルな枠組みとリンクするわけでもないのだ[cf. 吉岡 1994]。さらに言うなら、アネイチウム語はアネイチウム文化(あるいはアネイチウムのカスタム)と不可分に結びついているが、ビスラマ語と結合した文化はない。例えば、彼らがフツナ島民と話すときにはビスラマ語が用いられるが、そのフツナ島民にはフツナ文化(フツナのカスタム)が背景にあるのであって、ビスラマ語文化ではない。つまりビスラマ語は誰のものでもない言語なのである。

このように「カスタム」と「白人のやり方」という二項対立からビスラマ語を眺めてみると、この言語の持つ逸脱的な特徴が立ち現れてくる。それは決して「カスタム」の枠にも、「白人のやり方」の枠にも収まりきらないものなのであるが、だからといって、そうした特徴が何かひとつの特性で結びついて、第三項目を構成するかというと、決してそうではない。そこにあるのは人々の否定的な見解とそれに相反する有用性という両義的な認識だけであり、そこで第三項目が形成され、熟成していったクレオール文化とは決定的に袂を分かつことになる。同一性という概念規定さえ揺らぐ異種混沌のなかで、それを逆手にとって「礼賛」されたクレオール性と違い[cf. ベルナベ他 1997]、ビスラマ語に代表される「ビジン文化」はいつも否定的側面から描かれる。そしてカリブの知識人たちが、まさにその同化でも融合でも共存でもないクレオール性のなかに自ら身を置き、「クレオール人」になり、発言したのに対し、ヴァヌアツのエリートは「白人」の、村落の人々は「カスタム」の場に身を置いている。つまりヴァヌアツにおいて、世界は依然「バイカルチュラル」[吉岡 1994]に分断されているのである。

学校教育でのビスラマ語導入をめぐるのは、20年以上も紆余曲折があった。その有用性に賭ける「賛成」と、偏見から生じる「反対」。そのせめぎ合いの裏側には、こうしたビスラマ語の持つ両義性、そしてカスタムでもスクールでもない曖昧性が起因していたのだと結論付けることができるだろう。

謝 辞

本稿の執筆にあたって、神戸大学の吉岡政徳教授には草稿の段階から適切なお助言やご教示を賜った。アネイチウム滞在中、島民の皆様には日常生活のあらゆる面でお世話になった。また調査は2002年度神戸大学国際文化学会研究助成金によって可能になった。末筆ながら記して謝意を表します。

注

- 1) ヴァヌアツ共和国は太平洋に浮かぶ島嶼国である。1999年のセンサスで人口は21万人で、人々は大小80あまりの点在する島々で暮らしている。首都のポートヴィラと、サント島のルーガンヴィルが「都市部」であり、その他の地域は「村落部」とされる。現在、村落部でも貨幣の流通は浸透しているが、日々の生活はイモ類の焼畑農耕を中心とする自給自足的な農業を中心に営まれている。
- 2) アネイチウム Aneityum 島はヴァヌアツの最南端の島。1999年センサスで人口は821人。アネイチウムでの調査は2000年8月～11月、2001年11月～2002年10月の期間で行った。また調査にはビスラマ語とアネイチウム語を用いた。
- 3) Crowleyによると、一番大きな言語集団はタンナ島のレナケル語を話す人々であるが、それでも11500人であり、その後、北マレクラ語(マレクラ島)の10000人、ナカナマンガ語(主にトンゴア島、エファテ島)の9500人と続く(Crowley 2000a:69-70)。それに対して現在ではあまり使用されなくなったり、「絶滅」しつつある言語も多数あり、こうした確認の困難な「少数派」を含めると、研究者によってその総数にはばらつきがあり、「100あまり」という概算しかできないのが現状である。
- 4) カストム Kastom はビスラマ語で一般に「伝統」を指す語であるが、それぞれの言語集団はそれぞれ違ったカストムを持っていると認識されており、より狭義には「連綿と受け継がれてきた知識体系」や「自分たちの伝統的なやり方」という意味を持つ。
- 5) 調査は都市部(ポートヴィラ、ルーガンヴィル)と村落部(マレクラ、エロマンゴ、ペンテコスト)で700人の現地人を対象に行われた。この質問の選択肢は7つで全回答は以下ようになった。「現地語(vernacular language)」が23%、「ビスラマ語だけ(only Bislama)」が2%、「ビスラマと他の言語(Bislama and others)」が7.5パーセント、「フランス語」が12%、「フランス語と他の言語(French and others)」が14%、「英語」が5%、「英語と他の言語(English and others)」が18%。
- 6) 「被告」「原告」等に値する現地語、ビスラマ語は存在しない。しかし実際に広場に集まって話し合いがもたれているときは、こうしたグループ分けが自然に出来上がっているのである。
- 7) 特別な場合とは、「被告」あるいは「原告」に他島民が関わっている場合、あるいは事件が警察に報告されるような類のもので、参考人として警察官(現在のアネイチウムの常駐警察官はアニワ島の出身)が介在している場合である。
- 8) フィールドワーカーとは、国内の多様な言語やカストムを把握し、保存するために、ヴァヌアツカルチュラルセンターから委託された人々のこと。その言語集団の成員でカストムについて熟知していると言われる人が選ばれる。
- 9) Lynchは/mw/と/m/を、/pw/と/p/を、/ñ/と/n/を分け、表記の際にはそれぞれm̄、m、p̄、p、ñ、nと記した[cf. Lynch 2000]。しかしそれとてアルファベットの範疇で捉えることはできるだろう。
- 10) 現行の教育システムでは、6年制の小学校、4年制の中学校(lower secondary school)、3年制の高等中学校(upper secondary school)という構造をなしている。またヴァヌアツにおける教育の歴史などについては、紙面の都合上、ここでは論じられない。[McMaster 1990、Miles 1998]を参照のこと。
- 11) 観光船はシドニー発着で、アネイチウムの他、ニューカレドニアのヌーメアやフィジーなど南太平洋の島々を周遊する。この観光船は早朝にアネイチウム沖に投錨するが、その大きさのため島に直接、横付けすることはできない。そこで小型のタグボートが往復してアネイチウム本島の南西に浮かぶIñec(通称ミステリーアイランド)という小島に観光客を運ぶ(つまりアネイチウム本島に観光客が上陸することはない)。この島は陸

- 起サンゴ礁の島で、現在、飛行場があるが定住者はいない。観光客は多いときで2000人を越える時がある。彼らは海水浴や買い物を楽しんだ後、夕刻には観光船に戻り、その日のうちに次の停泊地へと向かう。
- 12) カヴァ kava (*piper methysticum*)はコショウ科の灌木。その根部の樹液にはアルカイド系の鎮静作用があり、飲むと酩酊感が得られる。儀礼などと結びついて、ポリネシアを中心にオセアニアでは広く飲用されているが、近年、ヴァヌアツ都市部では「カヴァ・バー」が新しいビジネスとして興隆している。
 - 13) 例えば憲法の第62条では、国民はどの公用語を用いても不平等にならないような「マルチリンガリズム」を謳っているが、その理念の具体的な解釈をめぐることは議論が錯綜している。[Early 1999、Crowley 2000a:50-54]参照。
 - 14) ヴァヌアツの言語政策の概観は[Thomas 1990]参照。また学校教育に関して、現地語の導入や、英仏カリキュラム二重性に関して論じた「第1期国家発展計画(The First National Development plan 1982-1986)」およびその後の「第2期国家発展計画(The Second National Development plan 1987-1991)」については[Hindson 1995]に詳しい。また憲法第64条に則ってマルチリンガリズムを調査、検討する政府諮問機関「オンブズマン制度」の活動、報告書に関してはEarly 2000に詳しい。
 - 15) 1864年から1901年まで、主にオーストラリア、クイーンズランドのサトウキビプランテーションで3年契約の労働に従事するため、ヴァヌアツからも5万人を超える男性が渡航した[Charpentier & Tryon 1982:149]。その劣悪な環境での死者は絶えず、またそれを補充する際に、詐欺や誘拐まがいのやり方で、村での働き手が駆り出されて行くこともあった。
 - 16) ビスラマ語の正字法に関しては[Crowley 1996]に詳しい。
 - 17) 2002年8月にアネイチウムに教育省の担当者とニュージーランド人のアドヴァイザーが来島し、ワークショップを開催した。その目的は、まさに「親たちの学校教育に対する意識を高める」ことであった。
 - 18) ヴァツ Vatu はヴァヌアツの通貨。2002年度のレートでおよそ1ヴァツ≒1円。
 - 19) ポートヴィラ～アネイチウム間は飛行機で往復25000ヴァツ、船で16000ヴァツほどかかる。
 - 20) Lynchらの辞書では「*ecamai*」[Lynch and Tepahae 2001:70]。
 - 21) 字義的には *imyisjis* は「～に反対する」、*ninvejec* は「真実」。

参 考 文 献

- ベルナベ, J.、シャモワゾー, P.、コンフィアン, R.
1997『クレオール礼賛』(恒川邦夫訳)、東京:平凡社。
- Charpentier, J-M.
1997 Literacy in a pidgin vernacular. In A. Tabouret-Keller, R.B. Le Page, P. Gardner-Chloros and G. Varro (eds) *Vernacular Literacy: A Re-Education*: 222-245. Oxford: Clarendon Press (Oxford Studies in Anthropological Linguistics).
- Charpentier, J-M and D.T. Tryon,
1982 Function of Bislama in the New Hebrides and independent Vanuatu. *English World Wide* 3(2): 146-160.
- Crowley, T.
1989 Language issue and national development in Vanuatu. In I.Fodor and C. Hagege (eds) *Language Reform: History and Future*, Vol. IV: 111-139. Hamburg: Helmut Buske Verlag.
1995a Melanesian Languages: Do they have a future? *Oceanic Linguistics* 34(2): 327-344.
1995b *A New Bislama Dictionary*. Suva and Port Vila: Institute of Pacific studies and Pacific Language Unit (University of the South Pacific).
1996 Bislama: Orthographic and attitudinal evolution. *Language and Linguistics in Melanesia* 27: 119-146.
2000a The language situation in Vanuatu. *Current Issues in Language Planning* 1(1): 47-132.
2000b The consequence of vernacular (il) literacy in the Pacific. *Current Issues in Language Planning* 1(3): 368-388.

Early, R.

1999 Double trouble, and three is a crowd: Languages in education and official languages in Vanuatu. *Journal of Multilingual and Multicultural Development* 20 (1): 13-33.

遠藤 泰生

2002 「クレオールのかたちを求めて」遠藤泰生、木村秀雄編『アメリカ太平洋研究叢書 クレオールのかたち』pp.1-18、東京:東京大学出版会。

福井 栄二郎

2001 「ヴァヌアツにおける学校教育とカスタム」『日本オセアニア学会 Newsletter』70、pp.1-8。

船曳 建夫

1983 「Kastom と Skul - ヴァヌアツ、マレクラ島の社会変化に関する微視的検討と理論的考察」『東洋文化研究所紀要』93、pp.31-66。

Hewitt, H - J.J.

1966 Aneityum of the southern New Hebrides: Anejom segmental phonology and word list - a preliminary report. *Te Reo* 9: 1-43.

Hindson, C.

1995 Educational planning in Vanuatu: An alternative analysis. *Comparative Education* 31 (3): 327-337.

今福 龍太

1994 『クレオール主義』東京:青土社。

Inglis, Rev. J.

1882 *A Dictionary of the Aneityumese Language*. London: Williams & Norgate.

Lawrie, Rev. J.

1892 Aneityum, New Hebrides. *Report of the Australasian Association for the Advancement of Science* 4: 708-717.

Lindstrom, L.

1997 Chiefs in Vanuatu today. In G. White and L. Lindstrom (eds) *Chiefs Today: Traditional Leadership and the Postcolonial State*: 211-228. Stanford: Stanford University Press.

Lynch, J.

1982 Anejom grammar sketch. In J. Lynch (ed) *Papers in linguistics of Melanesia* No. 4:93-154. Canberra: Pacific Linguistics.

1991 A century of linguistic change in Anejom. In R. Blust (ed) *Current in Pacific Linguistics: Papers on Austronesian Languages and Ethnolinguistics in Honour of George W. Grace*: 185-195. Canberra: Pacific Linguistics.

1995 The Anejom subject-marking system: Past, present and future. *Oceania Linguistics* 34 (1): 13-26.

1996 The banned nation language: Bislama and formal education in Vanuatu. In F. Mugler and J. Lynch (eds) *Pacific Language in Education*: 245-257. Suva: Institute of Pacific studies (University of the South Pacific).

2000 *A Grammar of Anejom*. Canberra: Australian National University.

Lynch, J. and M. Spriggs

1995 Anejom numerals: The (mis) adventures of a counting system. *Te Reo* 38: 37-52.

Lynch, J. and P. Tepakhae

1999 Digging up the linguistic past: The lost language(s) of Aneityum, Vanuatu. In R. Blench and M. Spriggs (eds) *Archaeology and Language III: Artefacts, Languages and Texts: Building Connections*: 277-285. London: Routledge. (One World Archaeology 35)

2001 *Anejom Dictionary / Diksonari blong Lanwis blong Aneityum / Nitasviitai a nijitas antas Anejom*.

- Canberra: Australian National University.
- McMaster, J.M.
1990 Education for development in Vanuatu: A review of policy issues. In K.G. Gannicott (ed) *Education for Economic Development in the South Pacific*. Canberra: Australian National University.
- Miles, W.F.S.
1998 *Bridging mental boundaries in a postcolonial microcosm: Identity and development in Vanuatu*. Honolulu: University of Hawai'i Press.
- Mühlhäusler, P.
1987 The politics of small languages in Australia and the Pacific. *Language and Communication* 7 (1): 1 - 24.
1996 *Linguistic Ecology: Language change and linguistic imperialism in the Pacific region*. London: Routledge.
- 小田 亮
1996 「ポストモダン人類学の代価」『国立民族学博物館研究報告』21 (4)、pp.807 - 875。
- RV (Republic of Vanuatu)
2000 *Statistical Annual Book Year 2000: Primary and Secondary Education*. Port Vila.
n.d. (1999) *Education Master Plan*. Port Vila.
- Siegel, J.
1996 The use of Melanesian Pidgin in education. In F. Mugler and J. Lynch (eds) *Pacific Language in Education: 155 - 174*. Suva: Institute of Pacific studies (University of the South Pacific).
- Singh, G.
2001 Literacy impact studies in Solomon Islands and Vanuatu. *International Journal of Educational Research* 35: 227 - 236.
- Thomas, A.
1990 Language planning in Vanuatu. In R. Baldauf Jr. and A. Luke (eds) *Language Planning in Australasia and the South Pacific: 234 - 258*. Philadelphia: Multilingual Matters.
- 豊田 由貴夫
2000 「メラネシア・ピジンと植民地主義」吉岡政徳、林勲男編『オセアニア近代史の人類学的研究—接触と変貌、住民と国家』(国立民族学博物館研究報告別冊 21号) pp.151 - 173。
- Turner, G.
1861 *Nineteen Years in Polynesia*. London: John Snow.
- White, G.
1993 Three Dimensions of customs. In G. White and L. Lindstrom (eds) *Custom Today. Anthropological Forum* (special issue) 6 (4): 475 - 493.
- 吉岡 政徳
1994 「〈場〉によって結びつく人々—ヴァヌアツにおける住民・民族・国民」関本照夫、船曳建夫編『国民文化が生れる時』pp.211 - 237、東京:リプロポート。
2000a 「歴史とかわる人類学」吉岡政徳、林勲男編『オセアニア近代史の人類学的研究—接触と変貌、住民と国家』(国立民族学博物館研究報告別冊 21号) pp.3 - 34。
2000b 「カスタムとカスタム—オセアニアにおける伝統概念研究の批判的考察」須藤健一編『オセアニアの国家統合と国民文化』(JCAS 連携研究成果報告書 2) pp.143 - 182。
2002 「ピジン文化としてのカヴァ・バー—ヴァヌアツにおける都市文化を巡って」『国立民族学博物館研究報告』26 (4)、pp.663 - 705。

School education and Bislama: Epistemological study of the pidgin culture in Vanuatu

FUKUI Eijiro

In this paper, I discuss the implication of a certain feature of Bislama, which is the national language of Vanuatu, from two viewpoints: one from the viewpoint of elite; and, the other, from the viewpoint of people in Aneityum, the southernmost part of the archipelago.

The Republic of Vanuatu became independent in 1980 after 80 years of joint colonial rule by the British and French government. The government of two countries, however, was not entirely excluded. Many problems still remain in the language policy or the medium language of school instruction. In the complex language situation that English, French, Bislama and vernaculars are simultaneously spoken, the Constitution (Article 3) states. "The national language of the Republic is Bislama. The official languages are Bislama, English, and French. The principal languages of education are English and French." It means that while English and French have been used as the medium of education, Bislama and vernaculars have been banned in school.

Bislama has been prevailing as lingua franca in the second half of the 19th century. Nowadays, almost all people in Vanuatu are able to speak it, and it is spoken as a means of communication mainly among the different language groups. Newspapers and radio programs of which people make use every day are also exclusively written or aired by this language.

However some elite have a prejudice against Bislama. They consider that this language is not a real language and is spoken mainly by uneducated natives. Besides the bias, Bislama entails some defective features in the educational respect: the deficiency of vocabularies, the lack of standardized orthography and so on. Although some educators, linguists, pedagogists and advisors have discussed and proposed the introduction of Bislama into school education, their opinion does not put into practice yet.

For people in Aneityum, on the other hand, school education is not only unimportant considering with its high cost but also an undesired. This is because people think school education may result of in loss of their *kastom*. Although officers and educators consider that the introduction of vernacular languages will save *kastom*, people in Aneityum do not think so. School education is viewed as "the way of white man (*fasin blong waetman*)." Similarly, they do not consider that Bislama is connected with their *kastom* although they are not biased like some elite because of their awkwardness at speaking in English or French.

In consideration of these characteristics of Bislama, I compare the pidgin culture (Bislama) with the Creole culture. While the latter wins general applause, the former is always viewed as negative both by elite and by people in Aneityum. The pidgin culture, then, is prescribed only by such a negative view since it does not have a specific field like "*kastom*", "*fasin blong waetman*" or Creole. Therefore I conclude that its negativeness or ambivalence is the characteristic of the pidgin culture.